

2015年11月23日

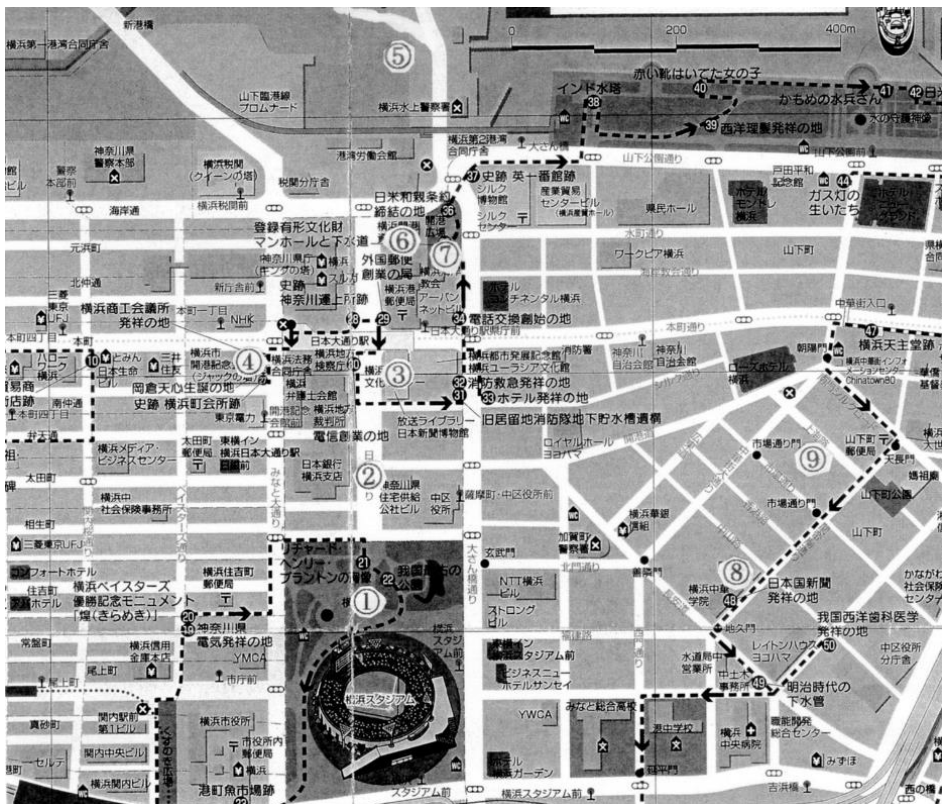
神奈川歴教協 秋のフィールドワーク

# 関内から中華街へ見学のしおり

[予定コース]

13:30 J R 関内駅南口集合～17:00 菜香新館到着

- ① 横浜公園 (岩亀跡跡) →
- ② 日本大通り →
- ③ 横浜商工奨励館 →
- ④ 横浜市開港記念会館 →
- ⑤ 象の鼻棧橋 →
- ⑥ 横浜開港資料館 →
- ⑦ 横浜海岸教会 →
- ⑧ 中華街 (関帝廟) →
- ⑨ 菜香新館



お話：曾徳深さん（菜香新館にて 045-663-3155）

「中華街の戦中戦後」

17:00 中華街の菜香新館にて曾徳深さんのお話

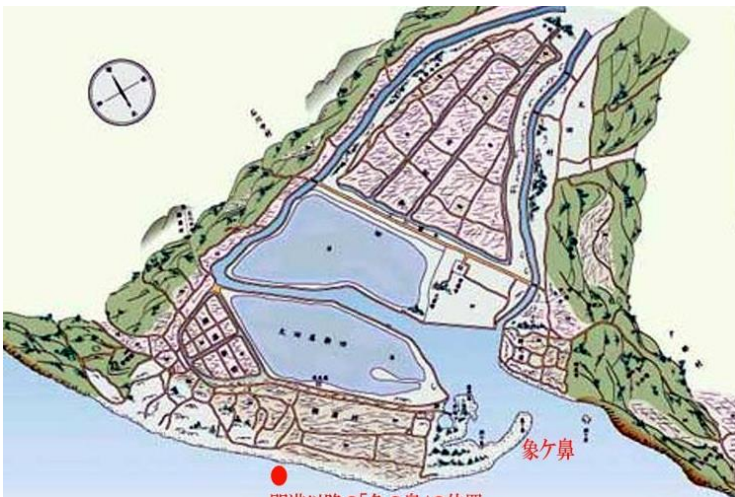
18:00 頃～会食（菜香新館）

参加者：

## 1 横浜公園

関内駅南口でJR根岸線を下車すると横浜スタジアムがある。このスタジアムのある公園が**横浜公園**である。

横浜公園一帯は横浜開港以前は太田屋新田の一部で湿地帯だった。1858年日米和親条約締結により、幕府は1859（安政6）年の7月の神奈川開港を約束したが、攘夷の機運が高まる中交通量の多い東海道の神奈川宿を外国人に開放することを警戒して、東海道から外れた漁村である横浜を開港場を選んだ。



1860年約1年間の突貫工事により山手の丘からくちばし状に伸びた砂州を運河（堀川）で切り離し、その内側を埋め立てて、外国商館や日本商人が進出

できる開港場を形成した。この堀川の完成により、開港場は川と運河に取り囲まれた長崎出島のような閉じられた陸地となった。一方幕府は横浜開港の1859年11月に江戸吉原から遊郭を誘致し、埋め立て地に港崎（みよざき）遊郭が作られた。その結果この辺りは遊女 500 人ほどをかかえる一大歓楽街となった。特に異人揚屋（外国人専用）だった岩亀楼（がんきろう）は竜宮城にたとえられるほどの華麗な作りで、見物人が絶えなかったという。その岩亀楼の名を刻む石灯籠が、現在公園の日本式庭園の一角に置かれている。

ところがこの港崎遊郭は、1866（慶応2）年の11月の大火（火元が養豚業者だったので豚屋火事という）で焼失してしまった。その後遊郭は関外の吉田新田に移転再建され吉原遊郭と呼ばれるようになったが、この遊郭も1871年焼失して高島町に移り、その後また焼失して1880年に吉田新田の南方現在の南区真金町、永楽町付近に移転し、永真遊郭街として戦後売春防止法が施行される1958年まで続いた。

一方火災の後横浜の外国人たちは幕府に居留地の整備と公園の設置を要求し、幕府との間に1866（慶応2）年「横浜居留地改造及び競馬場・墓地等約書」が締結された。幕府崩壊後もこの協定は明治政府に引き継がれ、造られた



のがこの横浜公園である。完成したのは1876（明治9）年で、外国人と日本人がともに利用できる公園だったことから、彼我（ひが）公園と呼ばれた。西洋式の公園としては、1871年開設の山手公園に続く日本で2番目に古い公園で

ある。中央にはクリケット場が設けられたが、これが後には野球場となり、1978年には現在の横浜スタジアムになった。西洋花火大会、国際親善野球大会、メーデーの集会在日本で最初に行われたのは、この横浜公園である。

また関東大震災時には避難場所となり、猛火に追われた多数の市民を救った。震災後は横浜の復興と共に最整備され、1929年復興記念碑が建立された。石造りのレトロな噴水はその当時のものである。



## 2 日本大通り

横浜公園から港に向かってまっすぐに伸びる大通りが**日本大通り**である。1866年の居留地大火の後、防火帯としても役立つように36メートルの道路幅をもち、車道と歩道が街路樹で区分された、日本初の近代道路として1871(明治4)年に完成した。この道路や横浜公園を含む横浜の都市計画を立て、工事を担当したのが「日本の灯台と横浜の街づくりの父」と呼ばれる、イギリス人技師R・H・ブラントンである。ブラントンは明治政府の招聘で1868年来日し、離日するまでの8年間で日本各地に灯台を建設したほか、水道計画、築港計画、居留地造成の設計・施工などを行った。ブラントンの胸像は、横浜公園から日本大通への出入り口脇に建てられている。

日本大通は港都横浜の中心として、その両側に神奈川県庁、裁判所、税関などのレンガ造りの近代建築が建ち並んだが、そのほぼすべてが関東大震災で瓦解した。従って現存する建築の多くは震災復興期の昭和初年(1928年前後)に建設されたも



三井物産横浜ビル

のである。

しかしただ1棟、三井物産横浜ビルだけは1911(明治44)年に建てられた、日本で一番古い鉄筋コンクリートのビルである。震災にも耐えて現在も使われている。設計は赤レンガ倉庫の施工にもかかわった横浜生まれの建築家、遠藤於菟(おと)で、白いタイルや曲線で処理した四隅など、現在の建築にも通じるデザインを持つ。

三井ビルと大通りをはさんで向かい側が**横浜地方裁判所**である。昭和初期に震災復興で建てられた重厚な建物で、太平洋戦争後にはBC級戦犯の裁判がここで行われた。近年建て替えられたが、外観は新しいビルの一部として復元された。

### 3 横浜商工奨励館

日本大通中ほど右側には、1929(昭和4)年建築の横浜商工奨励館の建物を利用し増築した**情報文化センター**がある。横浜商工奨励館は、関東大震災後の沈滞していた横浜経済の活性化のため輸出品のサンプルの展示施設として開設された。玄関を入ると地震への備えのための太い柱や高い天井、石造りの階段など重厚な作りである。

中央階段を登った3階には、1929年昭和天皇が震災復興視察に横浜を訪れた際休憩した貴賓室がある。

大通り左側、裁判所の先には**神奈川県庁舎**がある。震災復興建築として1928(昭和3)年に建てられたいかめしい建物で、「キング」と呼ばれる高さ49mの塔を持つ。このキングという愛称は、塔の屋根部分がギザギザで、トランプのキング(13の札)を思わせるか



らだという。ちなみに「クィーン」は1934年建設の横浜税関の丸いドーム屋根の塔（51m）、「ジャック」は横浜市開港記念会館の時計塔（36m）で、横浜三塔として親しまれている。県庁の敷地の南角には「神奈川運上所跡」の石碑がある。

## 4 横浜市開港記念会館

神奈川県庁の手前を左に進むと、時計塔を持ち赤レンガと白い石積みの外壁が美しい調和を見せる横浜市開港記念会館がある。高さ36mの時計塔は「ジャックの塔」と愛称される。1909（明治42）年横浜開港50周年を記念して市民から寄付を集め、それを基に1917（大正6）年に完成した。内



部には大ホール・商工会議所・ビリヤード室・食堂などが備えられ、大ホールでは演奏会や演劇が東京公演に先駆けて行われた。中央階段にはペリー来航時の黒船ポーハタン号、2階ホールには駕籠に乗った外国人をデザインした美しいステンドグラスがある。宇野澤組ステンドグラス製作所による製作である。建物は1923年の関東大震災で大きな被害を受け内部は焼失したが、ジャックの塔は倒壊を免れた。1927（昭和2）年復興、ステンドグラスも当初のものを尊重して復元した。戦後は進駐軍に接收されて「メモリアルホール」

という名称で、兵站司令部として使われた。1958 年接收解除となりその後は「横浜市開港記念会館」の名称で中区の公会堂となった。1989 年ドームを復元し、国の重要文化財に指定された。現在でも講演会や会議場として盛んに使われている。

## 5 象の鼻棧橋

横浜開港の 1859 年に最初の波止場として、輸出入貨物をあつかう東波止場（イギリス波止場）と、国内貨物をあつかう西波止場の 2 カ所の突堤が建設され、その間が船溜まりとなった。その後東波止場は 1867 年延長されて、船溜まりをかかえるように湾曲した形になり、象の鼻と呼ばれるようになった。横浜浮世絵にもその姿は描かれている。その後さらに東の、現在の山下公園内にフランス波止場が建設されると、従来の東波止場と西波止場は一括して東波止場と呼ばれるようになった。1896 年象の鼻棧橋の東に接して大棧橋ふ頭が建設され、大形の船が着岸できるようになると、象の鼻棧橋は役割を終え、船溜まりは埋め立てられて倉庫が建設された。しかし 2009 年横浜開港 150 周年を記念して、象の鼻棧橋と船溜まりは復元整備され、棧橋の付け根には象の鼻パークが新設された。この公園からは横浜のランドマークだった横浜三塔が一望できる。



横浜浮世絵に描かれた象の鼻棧橋

## 6 横浜開港資料館と日米和親条約調印の地

日本大通りを大棧橋方向に進むと、突き当りの右側が横浜開港資料館である。この付近で1854（嘉永6）年、ペリーと幕府との間に日米和親条約が締結された。これをきっかけに横浜が開港することになったことを記念して設立された資料館である。館内にはペリーの黒船模型をはじめ、日本の開国から横浜開港、文明開化に関わる様々な資料が展示されている。資料館の旧館は、1931（昭和6）年この地に建てられたイギリス領事館の建物である。領事館は1972年に閉鎖されたが、この建物を生かして色調などを統一した新館を建設し1981年横浜開港資料館が誕生した。

新館と旧館（旧領事館）に囲まれた中庭には、大きな玉楠（たまぐすタブノキ）が生えているが、これはペリー来航に随行した画家のハイネが描いた、日米和親条約締結当時の絵にも描かれている。横浜の歴史を見つめてきた証人のような老木である。関東大震災でこの木も焼け焦げたが、残った根から新芽が出て再生した。



ハイネの絵に描かれた玉楠

横浜開港資料館の隣には噴水が流れる「開港広場」がある。その一角に地球



をデザインした「日米和親条約調印の地の碑」がある。またこの広場の地下には、明治初めの赤レンガ造りの下水道が通っている。断面卵形の下水道とマンホールは保存され、ガラス越しに見ることが出来る。



## 7 横浜海岸教会

開港間もない 1861 年にアメリカ人宣教師（米国改革派）のジェームス・H・バラ夫妻が来日した。このバラ牧師によって、1869 年波止場に近いこの地に石造りの小教会堂が建立され、横浜に来航する外国人が集ってバラの司式のもとに礼拝が行われた。バラは彼のもとに英語を学びに来た日本人青年達にも情熱的にキリスト教を説き、1872

（明治 5）年 3 月 10 日にはキリスト教禁制下にもかかわらず 9 人の日本人がバラより洗礼を受けた。そしてこの日最初の日本人信者によるプロテスタント教会「日本基督公会」がこの地に結成されたのである。「日本基督公会」はどの教派にもよらない超教派を特徴とし、植村正久、井深梶之助などを中心に発展していった。

翌 1873 年キリスト教禁止が解かれると信者は増大し、1875 年には 500 名収容の大会堂を新築した。その後教会は 1921 年建て替えられたが、2 年後の関東大震災によって倒壊してしまった。現在の横浜海岸教会は 1933（昭和 8）年に再建されたものである。プロテスタントらしく飾りの少ない教会だが、尖頭の上のチャーチベルは 1875 年の教会建設当初のもので、現在も日曜日には礼拝開始を知らせる鐘の音を響かせている。



## 8 横浜中華街

中区山下町の約 500m 四方の東西南北の門に囲まれた地域が横浜中華街である。居住者約 6000 人のうち約半数が中国人である。店舗数は約 500、その

うち 200 店ほどが中国料理店である。

中華街の歴史は 1859 年の横浜開港時にさかのぼる。欧米人が貿易や海運関係の商館を開いた時、彼らは買弁（貿易の仲介・通訳）や、コックや子守など



の使用人として清国人を伴ってきた。当時日清間には条約が無かったため、清国人が居住を認められるためには、欧米人に雇用され、その使用人として各国領事館に登録されることが必要だった。

この時期に来日した清国人の大半は中国南部の広東省出身だった。広東省は当時のイギリスの植民地香港と接していることから、ジャーディン・マディソン商会はじめ欧米商館が早くから進出していたためである。

1871 年日清修好条規が締結されると清国人の入国が許可されるようになり、彼らは港に面した山下町に居住するようになり、みずから雑貨店などを営む者も増えてきた。1873 年には根岸（現中区大芝台）に中国人共同墓地である中華義荘が造られ、同年『三国志』の武将関羽を祀る閩帝廟も造られた。こうして中華街の原型が出来始める。

しかし 1894 年日清戦争が勃発すると、居留地全体の外国人人口 5000 人の

うち 3000 人を越えていた横浜華僑もその 3 分の 1 が帰国してしまった。

1899 年条約改正が発効して居留地が廃止されると、技術を持たない外国人の労働が規制され、華僑の職業は実質的に理髪・洋裁・飲食業の刃物を使う 3 種類（三把刀）に限られてしまった。その三把刀のなかでも明治末から大正・昭和にかけて増加が目立ったのが飲食業で、シウマイ、チャーシュー、南京蕎麦などの料理も普及していった。またアワビ、ナマコ、コンブなどの海産物輸出業や、西洋家具、ピアノ製造、欧文印刷の技術者も活躍した。

1892（明治 25）年中華義荘の中に「地蔵王廟」が建立された。華僑の人口は 20 世紀初頭には 5000 人余りに達していた。ところが関東大震災でレンガ造りの旧式建物が密集していた中華街は大きな被害を受け、2000 名近い犠牲者をだすことになった。このため神戸や中国本土にのがれた人々も少なくなかった。さらに 1937 年日中戦争が始まると、華僑の人たちは苦しい立場に立たされる。1937 年 12 月 14 日、日本軍指導の下に北京臨時政府が成立すると、横浜華僑の大部分は北京臨時政府を支持し、中華街全体に国民政府の青天白日旗ならぬ北京政府の五色旗がひるがえった。華僑が日本国内で生活していくための苦渋の選択だったと思われる。1945 年 5 月 29 日の横浜大空襲では、中華街の大部分が焼夷弾により焼け野原とされた。

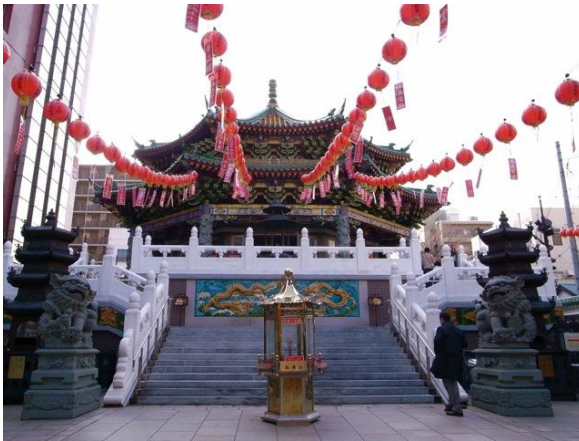
戦後は飲食業がいち早く営業を再開し、中華街は復興に向かった。1955 年には中華街大通りの入り口に牌楼（現在の善隣門）が建てられた。その後風水に基づいた牌楼が次々に誕生していった。



関帝廟は 1873 年の創設以来何度も建て直されて、現在の関帝廟は 1990 年再建された第 4 代目である。商業の守り神として、また中華街観光の目玉として観光客を集めている。2006 年には道教における海の女神である媽祖を祀る媽祖廟（まそびょう）も建立された。



関帝廟



媽祖廟

〔主な参考文献〕

『神奈川県歴史散歩 上』2005 山川出版社